

調 査 報 告

西ドイツの大学研究室

Activities of an Institute of a German University

中 村 英 夫*

Hideo NAKAMURA

著者は昭和 42 年および 43 年から 44 年にかけて西ドイツのシェットガルト大学において研究および教育に従事する機会を得た。この滞在を通じて著者の見聞した西ドイツの大学の事情を、とくにその研究室の内側から眺めて述べるものである。

は し が き

著者は 1 昨年 9 月より約 14 カ月間文部省在外研究員として、Alexander von Humboldt Stiftung より滞在研究費を得てドイツ連邦共和国（西ドイツ）において研究に従事する機会を得た。また 1967 年には約 5 カ月間にわたりドイツ学術会議(Deutsche Forschungsgemeinschaft)の招へいにより同じく西ドイツの Stuttgart 大学で客員教授として講義ならびに研究に従事し、同時に西ドイツの 2, 3 の工科大学において客員講義を行なった。この小稿ではこの二回の西ドイツ滞在中を通じて著者の見聞した範囲内での西ドイツの大学の事情を紹介し、また著者の感想の幾分なりを述べたいと思う。もちろん西ドイツの大学へは多くの諸先輩、諸先生が滞在され、訪問されているので著者のこの小さな報告には何らの新味もないのではないかと考えるが、長い伝統の中でも激しく変り行く現在の西ドイツの大学社会の側面のわずかでも伝えることができれば幸いである。

ドイツの学制

衆知のように西ドイツの学制はわが国の戦後のそれとは大いに異なり、われわれの旧制度のように複線形の仕組みとなっている。すなわち義務教育年限はわが国と同じく 9 年間で、上級学校へ直ちに進学しない生徒はこの課程を小学校(Grundschule)でおえるわけであるが、将来大学へ進もうとする生徒は小学校を 4 年終えたのち高等学校(Gymnasium)へ進学する。この高等学校は古典語すなわちギリシャ語、ラテン語に重点をおくもの、近代語すなわち英語、フランス語を重視するもの、自然科学中心のもの、芸術教育を行なうものの 4 つの種類に分けられる。高等学校を 9 年間修学したのち卒業試験(Abitur)をうけ、これに合格すれば大学入学資格が与えられる。小学校を 9 年間おえた生徒は各種の実業学校(Berufsfachschule)へ進学し、そののち実務につくかあるいは 2, 3 年の実習期間を得たのち専門学校へ進みさらに専門的な知識を得る。学術的な専門知識を必要としない

職業を志す者は、見習いとしてそれぞれの実務に従事しその間約 3 年間実業学校に働きつつ学び将来親方(Meister)になる訓練を受ける。

こうしたドイツの学制においてわれわれの目につくのは同一年令層中に占める上級学校進学者の割合がわが国やアメリカに比べて著しく低い点であり、その比率は年々増加の途をたどっているとはいえ現在で Gymnasium 進学者の数は同一年令層の中で 10% 内外を占めるにすぎない。そのため新しい社会に対応すべく、上級学校進学者を積極的に増加せしめることが、新しい教育政策の一つの象徴的目標となっている。

大学生の総数もアメリカやわが国に比べれば数字としてははるかに小さいものであり、現在約 28 万人程度である。しかし 20 年前のそれが約 11 万人であったことを考えればその増加はきわめて急激であり、これがハイデルベルク大学をはじめとして 14 世紀以降からの長い伝統をもつドイツの大学がもはや古い大学理念に執着していることを許さなくしている一つの原因となっている。

ドイツの大学は一般に Hochschule と総称されているが、その中には学術的大学 Wissenschaftliche Hochschule (学位授与権をもつ)、教育大学、音楽大学、神学大学等が含まれる。Wissenschaftliche Hochschule は現在 18 の総合大学(Uni と略称)と 9 つの工科大学(T.H. 又は T.U. と略称)、医科その他の単科大学 4 を合わせて 31 大学となっている。以下に大学と言う場合、この Wissenschaftliche Hochschule のことをさすが、これは数からいっても、その内容からいってもわが国の大学院博士課程をもつ大学に相応すると考えても良いだろう。

ドイツの大学は 19 世紀に Wilhelm von Humboldt が諸学の統一、教育と研究の結合、教授と学生の密接な精神的結びつきと学問的訓練を通じての人格陶冶等を新しい理念としてベルリン大学(現在の東ベルリンのフンボルト大学)を創設してのち大いに興隆し、近代的大学の一典形として各大学がこれにならい諸分野において輝かしい業績を挙げた。これらの大学の伝統は人も組織も膨脹し、学問の質も内容もいちじるしく拡大した現在に

* 東京大学生産技術研究所 第 5 部

も多かれ少なかれ引き継がれている。たとえば名称、講座制度、試験制度、大学の運営機構などの諸制度や、学生の大衆化、学問の細分化にもかかわらず、公務員試験などの国家試験を受ける学生も、将来学位をとり研究者を志す学生も同一な学習課程の中で教育を施している点などである。こうした古い理念と新しい要請にはさまれて、ドイツの大学も改革への苦しみの中にあるのが現状といえよう。ここではまずこうした状態にある大学を研究室の中から眺めてみることにしよう。

大学の研究室

大学の最小構成単位はわが国と同様講座 (Lehrstuhl) である。この講座を一人の正教授が講座所有者として担当し講座の管理責任者となる。教授の社会的権威は非常に高く、その称号は現在においても高い社会的地位を表わす。たとえば今をときめくシラー経済相も正式にはシラー大臣と呼ばれるのでなくあくまでシラー教授なのである。この教授のもとに数人の助手および時によっては員外教授、講師等が加わり一つの講座を構成する。また多くの場合講座のほか研究室 (Institut) が講座と重複し



写真1 シュツットガルト大学構内
正面の高層建物が建設学部

て設けられ、これは主として研究中心的な色彩をおびるが、同一教授が講座と研究室をもっている場合その二つの間には判然とした区別はない。助手は学生実習、ゼミナールの指導と並んで研究室における研究活動の主たるにない手となり、多くはその数年の在職期間中に学位論文を仕上げることをもくろんでいる。

しかし伝統的に小人数教育、実務教育を重んずるドイツの大学特に工科大学では助手にかかる教育負担はきわめて大きく、学期中に多くの研究時間をさくことは非常に難しいように思われる。研究室での研究は助手のほか、教授が私的に採用する研究助手にも分担される。彼らには一般的に比べて余り多くの教育上の負担はなく研究に集中して研究プロジェクトを遂行しまたそれを基にして学位論文をまとめることに励む。わが国のように大学院制度のないドイツでは学位を取得したい者はこうした助

手の形で大学に籍をおいて研究を進めるか、あるいは何らかの奨学金的なものを得て博士候補者 (Doktrant) として、教授より認められたテーマについて研究をまとめるか、あるいは実務につきながら博士論文を仕上げて提出するかを選ぶ。博士なる称号に対しての社会的評価はわが国におけるよりもはるかに高いように思われるし、したがってこれをとることへの執着心も強いようである。

学位を取るに至る過程はわが国とほぼ同じで教授の指導を受けつつ論文を仕上げ、主査および数人の副査より成る審査委員会での審査を得て学位授与に至る。論文は通常、所属する学協会の学位論文集の中の一冊として公表される。研究に際しての自己の独創性はその公表まできわめて内密に保持されるのはわが国におけるよりもはるかに徹底しているように思われる。そのため助手あるいは研究室メンバー間での共同研究の遂行が難しいとの不満もしばしばきかれる。学位を取った大学で教授になることは原則として許されない。この原則は教授の人的交流に有効に作用しているようである。

研究費は大学よりの講座研究費のほか、大規模な研究に対してドイツ学術会議 Deutsche Forschungsgemeinschaft あるいはフォルクスワーゲン財団等の民間財団より得られる。ドイツ学術会議は連邦政府と州政府により資金がまかなわれ、年間 200 億円近い予算をもっていて各種研究の助成にあたる。政府機関あるいは民間からの委託研究費も研究室によっては大きな研究資金となっている。

研究室の研究設備は、他の部門は知らないが、著者の関係する範囲内では東大のそれと比べてもずっと充実したものであるようである。たとえば Stuttgart 大学は学生数が 5,000 人程度の規模の大学であるが、ここには CDC 6600 型の超大型電子計算機のほか UNIVAC, Telefunken などの大型計算機も設備されている。東大の計算センターの現状や、Stuttgart 大学とはほぼ同規模の東京工業大学に大型計算機が皆無であるという現状を考えるとその差はきわめて大きいといわざるを得ない。電子計算機以外でもたとえば著者の専門の写真測量学についていえば、当研究所に設置されている写真測量図化機と同程度のものが Stuttgart には数台おかれ研究にあるいは学生の実習に使われている状態である。

研究室には研究スタッフを形成する教授、助手等のほかに、これらの設備のオペレート、製作修理等にたずさわる何人かの技師が加わり、さらに秘書、製図工なども働くので総勢としては 10 数人以上に達するのが一般である。

研究室の日々

研究室の一年の生活をたどってみよう。研究室の年度

の区切りがどこにあるのかははっきりとしない。しかし一応わが国の場合と同じように一年を周期とする研究室のリズムのはじまりを4月としておこう。

春の遅い南ドイツも復活祭のころになると陽気な日が続きたくさんの花が咲き出し急に花やいだ感じとなる。4月中旬からはじまる夏学期の準備のため研究室内にはいろいろな仕事があふてくる、評議会をはじめとする種々の学内会議が開かれ教授は講義の準備とともにそれらに多忙な日となる。助手は学生の実習の計画をつくり、学生に告知する。ゼミナールで学生が担当し、発表するテーマを研究室内でつくり上げ、それに必要な参考資料を準備する。秘書はとりわけ忙しく、これらの学生への通知、会議の資料整理等のため教授達の口述を速記し、それをタイプにたたくのに追われる。美しい若葉の5月は夏学期もたけなわであり、学内は学生であふれる。教授や助手の決められた面会時間(Sprechenstunde)には課題やゼミナールでの発表についての相談に来る学生が部屋の戸口で順を待つ。ゼミナールは2,3の関連する研究室が合同で開かれることが多い。たとえば道路工学、交通工学、鉄道工学の研究室が一緒になるといった具合である。ゼミナールには学生のほか、これらの全研究室の教授、助手をはじめとするメンバーが全員出席し、あらかじめ決められたテーマについて発表する学生に質問をあげ全員ではげしく討論する。時には学生その場で教授間同志の議論になることもある。技術的、学問的な討議のほかに学生の講演の仕方に対する批判にも多くの時間が費される。大学を卒業した技術者には人の前で発表する機会も多くそのための十分な訓練も必要であるという考えに立っているためである。討論が続くとしばしばゼミナールは夕方6時、7時までと数時間もつづく。しかし、初夏の北国の太陽はまだかなり高い。学外の人がたくさん出席する講義やあるいは学外からの講師……非常にしばしば外国からの講師が来る……による講義は主として夕刻から始められ多くの人の出席が可能のように配慮されている。

5月、6月、7月は実習もたけなわである。特に測量の実習など戸外で行なわれるものは、この時期に集中する。実務を重視するこの国の工科大学では実に多くの設計や実習の課題が出され、学生はその仕事に追われる。また学生から提出された設計や実習の結果は助手たちにより、たんに目を通され、問題点を指摘される。実務重視ということは、工科大学に入る学生は入学前にすでに現場での実習を2カ月間程度以上行なって来ることを要求されるという制度にもよく表われている。この実習は計算手伝いなどの仕事ではなくあくまでも職工、大工、土工等の手作業(Handarbeit)でなければならないのである。また学生のみでなく教授や大半の助手も一度は技師として外の社会で働いた経験をもっているため、この実

務重視教育は至って徹底したのになっているといえよう。

朝8時より昼すぎまで部屋にとじ込め仕事をした研究室のメンバーは、昼には連れ立って大学のMensa(食堂)へ行きそこでゆっくりと語り合いながら昼食をすます。天気が良ければその後のしばしの時間を構内の芝生の上で太陽をあびて話し合い、また午後の仕事に向う。夏学期も終りに近づくとも学内の掲示板には見学会の広告が目立ってくる。多くはアメリカ、フランスあるいはその他の外国への各専門別の見学旅行のメンバーを募集するものである。そのほかもちろん海辺やアルプスでの休暇旅行の団体募集広告もいっぱい掲げられる。学生組合(ASTA)の組織する団体旅行は非常に安く、アメリカの往復旅費が2週間の滞在費込みで7万円程度のものさえある。

休暇が始まり、学生のいなくなった研究室は再び研究中心の生活に戻る。大がかりな実験などもこの時期に集中的に行なわれる。大半のメンバーはこの時期にまた交代で休暇をとりそれぞれの家族と共に2週間程度、イタリアやユーゴスラビアの海岸あるいは北欧やスイス、オーストリーへと車ででかける。28、9才の助手の月収は13万円近いからぜいたくはできないにしても家族そろっての休暇旅行は経済的には不可能でない。しかし学位論文の仕上げに忙しい幾人かは休暇をとったとしてもどこへも出かけず自宅で仕事に没頭する。研究室のメンバー全員で主として近くの国へ見学旅行へいくこともしばしばである。見学した結果はそれぞれ分担者が報告をかき、場合によってはアルバムを作り記録をつくる。

9月は5、6月と共に学会などが集まる時期である。学会は国内だけでなく、ヨーロッパ内のどこかで関係する分野の学会がいくつか開かれるので、到底これらのどれにも出席する訳にはいかない。出席する学会で当人が論文発表する場合に限って大学から出張旅費が出ることが多いので、出席する会議はそうしたものに限られる。大学からの旅費の支給に際しては近い国なら国内と別に差別はしないのでいたって気がるに出かけ常に他の国の研究者と密接な情報交換を行なうことができるのは地理的言語的に隔離したわれわれにはうらやましくも思われる。さきに述べたドイツ学術会議はまた、教授、研究者の海外への渡航旅費をも補助するのでここから旅費を得ることも多い。

南ドイツの森もみごとに紅葉し、秋晴れの空と素晴らしいコントラストを示すようになると冬の学期が始まり学内も研究室内も再びにぎやかになる。第9学期に入った学生は卒業試験をうけ、さらに卒業論文(Diplomarbeit)にとりかかる。ドイツの大学には修業年限といったものではなく8学期以上を修学したものがこの卒業試験を受けられるようになっている。すなわち最短修業年限がおさ

えられているだけである。卒業論文はわが国の修士論文のように、極めて専門化し、オリジナルなものを要求されることはなく、それよりも広く文献を調べ、その中に問題を見つけ、自分なりの考えをそれにつけ加えるといった感じのものが多くある。したがって余り大きな実験を要するようなものはまれである。

10, 11 月と研究室の活動は教育面でも研究面でも一段とピッチが上ってくる。緯度の高いドイツでは出勤時間の午前 8 時はまだ暗く、車も道も凍っている。しかし 8 時に始まるのは大学ばかりでなく大半の事務所も商店もそうであるし、また小学校などは 7 時半ごろから始まる日さえある。子供達は真暗で街灯のみが冷たく光る道を学校へ向う。そして 11 月過ぎごろでは夕方 3 時をすぎればもうす暗くなってくる。したがって大学の講義もこの期間は暗いうちから始まりまた終るのも真暗になってからである。講義室の中も終日す暗い。各講義室には大形の投影機が設置されており、図や表などあるいは数式などはいちいちスライドにする必要もなくその描かれた紙を投影機に挿入するだけで前面に投影される。

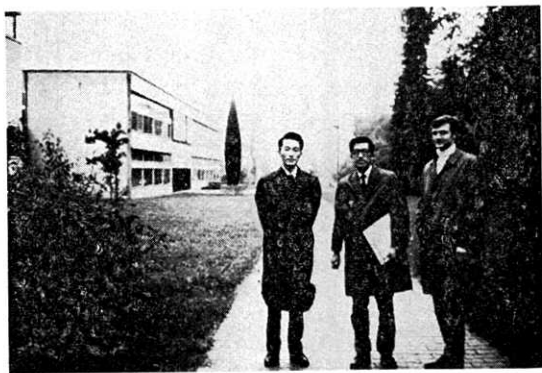


写真2 シュツットガルト大学計算センター前にて
(左端は本所小林助教授、中央が筆者)

各学科ごとで学生の主催するダンスパーティーが行なわれるのもこの時期であり、研究室のメンバーもこの時は教授以下それぞれの夫人等を同伴し美しく着かざって出席する。余興では学生の作った各教授を風刺した歌や詩が被ろうされ、かっさいを浴びる。しかしこの種のパーティーも Stuttgart 大学の土木工学科では昨年までで終りのようである。学生側からこの種の集まりは間違った教授と学生の人間交流の仕方であるといひ出されたためである。

最近教授の講義に対しての批判が Vorlesungskritik と称してある程度制度化された形で行なわれるようになってきた。すなわち学生は投書箱に批判をかいて入れ、それが教授の手元へ回ってくるようにしている。その内容はさまざまであり、講義内容の陳腐さを批判するもの、開講時間を守らないことへの不満、助手の実習指導の不親切への不満等々である。

クリスマスも近づくと街も大学の中も何となく浮き立

ってくるような気がする。各研究室ではそれぞれ夫人同伴でクリスマスパーティーを開き、いわく因縁つきのプレゼントを交換し合い、歌をうたって楽しい時間を通す。クリスマスの休暇がすめば大晦日を除いて仕事は平常通り続けられる。娯楽の機会の少ないドイツの冬にあって唯一のみんなの楽しみは人を招び、人に招ばれて金曜日や土曜日の夜を過ごすことだろう。ワインを飲みながらの話は子供の時から旅行したときの話、物価が上った話、そして音楽へ絵画へと際限がない。一般的にいった彼らの知的興味は極めて広いように思われる。夫人連れのせいか余り研究上の話は出てこない。このような際に著者が感ずるのは、この 2, 3 年の間に彼らの日本への理解の仕方がはっきりと変わったことである。遠くのエキゾチックな国から経済の迅速に発展する国、造船の国へである。われわれの研究はもちろんその研究成果自体をもって、その価値判断されるべきであろう。しかしわれわれが多くの研究論文の中からいくつかのものに興味を示すとき、特に工学分野では、その論文を著した研究者の活動する国の一般的な工学技術水準を知らず知らずのうちに念頭においてその論文に興味をひかれることも多いのではないだろうか。そのようなこともあってか世界一速い鉄道の走る国で研究してきたわれわれの仕事に対して特に多くの興味をひかれることもしばしばであった。

研究室でのたとえばデータ整理やちょっとした測定などは Hilfsassistent と呼ばれる学生によって行なわれる。彼らは高学期に属する学生で一学期中何時間かの決められた時間を研究室でこのような手伝いをしなければならぬ規定となっている。その仕事に対しては何かしらの給料が支払われる。

2 月中旬には冬の学期も終る。卒業試験を終え卒業論文を仕上げ、その審査に合格した学生は学内の掲示板に貼られた求職案内あるいは新聞の求職広告等を手がかりにそれぞれの新しい職場へと散ってゆく。

研究室からは大半の学生の姿も消え再び研究だけの静かな日が春の学期休みが終るまで続く。

大型研究および国際協力

西ドイツで最も広く読まれている高級週刊誌「Der Spiegel」は昨年「ドイツの科学技術は国際競争力を保ちうるか」というテーマについて特集記事をかかげた。その中で同誌はアメリカとの技術格差がより拡大する傾向にあるだけでなく、さらに日本にも多くの分野において追い越されつつあると述べた。そして日本においては科学技術振興について積極的な施策がなされ、理工科系大学は急速に拡充され、そこから生み出される科学技術者の数は西ドイツの数倍にも当たり、西ドイツはこの面でも大きく立ち遅れていると警告した。しかしわれわれの目から見ると現在の彼我の関係はシュピーゲル誌の示

すのと全く逆の状態にあるように思われる。なる程われわれの理工科系大学の卒業生数は西ドイツ工科大学のその5倍以上にもなるが、それらの多くの内容や質は西ドイツの工業専門学校の程度の域を出ず、名目的な理工科大学や卒業生の数の増加とは逆の様相さえ呈しているようにも思われるのである。またさきに述べたようにわが国の大学と比してより規模の大きい研究室、より完備された研究設備は、わが国の場合よりもより大きい規模の研究をドイツの大学の各研究室が遂行することを可能にしているのである。ますます大形の研究プロジェクトにいとまねばならない現在、わが国と同程度の国力をもつ西ドイツとの間にも存在するこのような格差を埋め、わが国の研究上の制約をへらすことはわが国の科学技術の発展のため必須の要件であろう。

ドイツでは基礎研究のほとんどが、応用研究の半分以上が大学を中心として行なわれているといわれている。大学のほかにも多くの研究機関があるがその代表的なものはマックス・プランク協会である。マックス・プランク協会は連邦政府の学術研究省より資金を得てドイツ各地に約 50 の研究部門を持ち、それぞれその地にある大学と密接な関係をもつ。組織こそ違え、実際上はわれわれの大学と附置研究所の関係と同じようになっている。ドイツの大学研究室の単位は大きく研究規模もわが国のものよりも大きいと先に述べたが、しかしこれとても巨大化する科学研究にとっては細分化されすぎている。そのため新設されたボッフム大学では中央研究所を設け、慣例的な専門区分を打破し、各専門分野の孤立化を防いで大規模な総合研究を可能にしようとしている。またこの大学ではこれまでの他のドイツの大学と異なり、総合大学の中に工学系の専門分野を入れ、人文科学等との密接な総合研究を目ざしている。また他の工科大学では逆に医学、人文科学等の他の専門部門を導入する傾向にある。さらに最近、いわゆる研究大学の新設が具体化しつつある。そこでは総合的、応用的な専門領域に研究の重点をおき、その研究重点に応じて研究者のチームを編成するように考えられている。

非常に巨大な研究に対してはもちろん一大学内でのみ遂行できるものではなく、地理的に、学術レベルにおいて近接した多くの国をもつヨーロッパではたとえば原子核研究や宇宙開発にみられるように各国の共同体として一つの研究組織、施設をもち、各国研究者の共同利用が行なえるようになっている。このような点においても地理的に孤立化しているわれわれより恵まれた境遇にあるといえよう。

ドイツはまた国際的な研究者の人的交流にきわめて熱心であり着々その成果を挙げている。Alexander von Humboldt 財団は年間約 400 人の研究者を世界各国、各専門分野よりドイツに招き、月々 12 万円～16 万円の

奨学金を出し、自由に研究できる機会を与えている。年一回の総会には全奨学生を招き、大統領や財団理事長のハイゼンベルグ教授が出席の下に講演会のほか夕食会、オペラ会等が催される。そして全員に自由にドイツにおける大学、研究制度等を批判させ、今後の改善に役立てようとする。

この他前述のドイツ学術会議による外国からの客員教授の招へい、あるいはドイツ学生交換会による外国奨学生の大量受け入れ、ドイツ人学生の外国への派遣等は、ドイツ国内をはじめ世界主要都市でのゲーティンスティチュートによるドイツ語およびドイツ文化の普及事業と共に、ドイツと他の国の間の学術文化交流および相互理解の上でも将来大きな効果を表わすであろうことは疑いの余地もない。

ドイツの各大学で研究に従事するわが国からの研究者は実に多くの数にのぼっている。フンボルト財団の留学生のうち約 1/3 はわが国からで、ここ一、二年のチェコスロバキアからの留学生を除けば毎年一番多くの研究者が奨学金を得ている。一方わが国への、ドイツのみに限らず世界各国からの研究者の受け入れの現状は実に寂しい限りといわねばならない。ドイツを抜き国民総生産が自由世界第 2 位といわれるわが国である。われわれの大学へも研究機関へも、より多くの外国研究者に来てもらい、著者がドイツでできたと同じように自由に研究ができ、お互いに研究協力できるような体制がわが国にもできたならばわれわれ研究者もわが国の経済力が世界 2 位であることを誇れるようになるだろう。

新しい大学への動き

西ドイツにおいても大学問題は一つの大きな社会問題であり各方面より大きな論議がなされ、その結果大学改革の種々の試案が提出されそのいくつかはすでに実行に移されている。これらの問題はきわめて大ざっぱに分けて次の二つの原因より生まれていると考えられる。すなわち一つは大学の大衆化と学問の細分化より生じた教育および研究遂行上での矛盾であり、いま一つは旧態依然たる権威主義といわれる大学の管理制度への反発からである。

学生数の急増と学問の専門化は研究と教育の統一を危うくし、従来とは異なった教育的課題を必要とするようになった。これに対して大学の増設がなされると共に、教育目標を段階的学習課程において分け、社会へ直ちに出る学生に対する教育、さらに進んで研究に対して能力と関心をもつ学生への教育、および卒業生に与えられる学習に分けて行なうことが提案されている。今日においては研究と教育の統一という原理を貫くことは不可能であるし、また不必要であるという議論も一部には存在する。しかし研究と教育の分離は研究を孤立化するのであ

って生き生きとして効果の大きい研究は学問的教育を必要とすると考えるのが大勢である。すなわち学問的教育は部分的結果を上級の観点からまた体系的関連において述べ、そのさいの部分的結果を判断するための基準をこしらえ、自らを批判し新しい刺激を受けとるために必要な機会を提供するのであり、逆に研究と結びついた教授のみが学習者を学問が前提としている諸活動へ導びくことができるとしている。なお長すぎる学生の在学期間を抑えるための最長学習期間を規定することも検討されている。

大学の管理運営機構については種々の大学規約案が出され論議されているが、その中で最も目立つものは、いわゆる三分の一均等権についての検討である。すなわち大学内の運営機関において、教授、助手、学生がそれぞれ均等の発言権をもつ方式であって、大学自治への直接参加を求める学生の象徴的目標となっている。

長い伝統をもつ西ドイツの大学もこのように新しい社会につながる大学への脱皮を旨として、その方向を模索

しているのが現状であるといえよう。

おわりに

以上に著者はその滞在を通じて見聞した西ドイツの大学を主として Stuttgart 大学の一研究室の中から眺めて幾分主観的に述べた。したがってこれらの事情は必ずしも他の大学、他の研究室には当てはまっていないかも知れない。なお大学問題その他については西ドイツ学術評議会の「Empfehlungen zur Neuordnung des Studiums an den Hochschulen」(東大出版会刊「世界の大学問題Ⅰ」の中で翻訳刊行)を参考とした。

おわりに著者の長期外国滞在中をお許し下さった生産技術研究所の皆様、特に著者の所属する研究室の丸安教授に深く感謝するものである。また Alexander von Humboldt 財団および Stuttgart 大学の Prof. Dr.-Ing. Linkwitz の著者へ示された様々の好意と便宜に厚く感謝したい。

(1970年2月26日受理)

